
日本村落研究学会 研究通信

(No.181 1996.3.12)

《事務局》細谷 昂、小林一穂

水上英徳、山田佳奈

〒980-77 仙台市青葉区片平二丁目1-1

東北大学大学院情報科学研究科

社会構造変動論研究室

TEL/FAX:022-217-5081

郵便振替口座 02280-5-10802

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1.新会長あいさつ | 11.学会奨励賞ワーキング・グループより |
| 2.亀岡大会(第43回)印象記 | 12.九州地区研究会のお知らせ |
| 3.1995年度第5回理事会 | 13.農村女性についての研究会(仙台) |
| 4.1995年度日本村落研究学会大会 | 14.アジア社会科学研究協議会 |
| 5.1996年度第1回理事会 | 第11回大会に参加して |
| 6.1996年度第2回理事会 | 15.1996年度大会について |
| 7.研究委員会より | 16.第9回世界農村社会学大会案内 |
| 8.『年報』編集委員会より | 17.世界農村社会学会にともなう |
| 9.『村研ジャーナル』編集委員会より | 研修プログラムについて |
| 10.国際交流委員会より | 18.会員異動 |
| | 19.郵便振替口座の変更のお知らせ |
-

新会長あいさつ

「ふるさと」としての「いえ」と「むら」 —会長就任のあいさつにかえて—

明治大学 長谷川昭彦

「ふるさと」はある人の幼少年時代を過ごした場所または集団をいうと思います。そこは人が成人となり、他郷に移動しても永遠に変わらずに「ふるさと」であり続けると思います。

このことを私どもの学会、日本村落研究学会に当てはめてみるができます。日本村落研究学会はその前身は「村落社会研究会」(通称「村研」)であり、その成果は年報『村落社会研究』として結晶しています。1954年に第1巻が出版され、第9巻までは時潮社から出版されましたが、続いて名称は同じですが1965年からは巻を改め第1集とし、第10集までは塙書房から刊行されました。そして1975年の第11集からは御茶の水書房に

引き継がれ、さらに1988年の第24集からは農文協から出版されて、1995年には第31集に及んでいます。この間「村落社会研究会」は1992年大会で名実とも学会にするという方向で大きく改組されましたが、村落社会学会などという名称ではなくて、「村研」という通称を受け継ぐことができるという意味で「日本村落研究学会」という名称に改められました。これを機に従来の『年報』に加えて、1994年からは『村落社会研究ジャーナル』

(通称『村研ジャーナル』)が新たに発刊されて、すでに3号が刊行されています。したがって、「村研」の幼少年時代は「村落社会研究会」の時代であり、「ふるさと」を形成してきた時期であると思います。「日本村落研究学会」の時代にはいると、青年時代にはいり、「ふるさと」から脱却してもっと広い世界へ踏み出してきたといえるでしょう。そのかわり、やや異境でさまよいたと見ることができなくもないと思います。

このことは「村研」の研究や論議の歴史からもたどることができます。この辺は『年報』に記載された大会における「共通課題」とその討論からうかがうことができます。「村研」が設立された当初の1950年代は農地改革に始まって村落共同体の問題が熱っぽく議論されました。60年代にはいると政治体制、農政や農民層分解そして後半には日本農業・農村の近代化、集団栽培の問題が現れ、70年代には研究方法の再検討、生活構造、そして過疎、都市と農村という課題が設定され、後半には日本資本主義と「いえ」、生活破壊、農村自治という課題が設定され、討論されました。80年代にはいると農村計画、農政、土地、また後半から90年代には「農村社会編成の論理と展開」ということで「家と村落」「家と農業経営」「主体形成」「家族農業危機」の問題がとりあげられました。そして村落社会研究会が日本村落研究学会に改組されるにつれ、いままでの大会の持ち方や共通課題の設定に関してマンネリ化しているとか時代に合わないという批判がおり、むしろ自由報告に重点を置き、緩やかなテーマを設定するという方向に変化してきました。さらに『村研ジャーナル』が新しく発刊されるにしたがって、「村研」の研究動向は大きく変化して、たとえば、大会での発表は以前には共通課題報告者が4人でいど、自由報告者が5、6人であったものが、昨年(1995年)の報告申込者は自由報告セッションで16人(実際には2人報告辞退)とテーマセッションが4人の計20名にのぼりました。じつに倍増で、この点から見れば研究は活性化してきたといえましょう。そして『村研ジャーナル』はまだ3号しか刊行されていませんが、大会での自由報告が主として掲載され、その内容は家族、親族、自治組織、消防組織、女性の地位、移民、出稼ぎ、環境整備、農業社会学、漁村などの日本の農村・漁村の理論的実証的研究のみではなくて、タイ、中国など国際的な視点からの外国研究も現れてきた点は注目されなければならないと思います。

以上のように最近の村落研究が増加し、多様化してきたことは結構なことではありますが、それだけ分散化し、散漫化していく傾向は免れません。この辺で私どもの学会の芯になり、核となってきたものを反省し、再考してみる必要もあるのではないのでしょうか。大まかではありますが、上述のように、「村研」の研究史をたどってみますと、比較的初期は研究や論議の対象は「むら」と「いえ」に集中していたといってもよいでしょう。それらへの取り組みに見られた熱意とエネルギーは現在でも教えられるものがあります。それゆえに、「むら」と「いえ」の研究の成果は私どもの学会の貴重な財産であるのみでなく、わが学会の研究の原点であり、「ふるさと」であると思います。

このようにいっても「村研」の研究が「いえ」と「むら」にだけ限定されるべきだということではありません。高度経済成長期以来日本の農村が大きく変動し、多様化していくにつれて農村の問題も論議の中心が少しずつ変化して、「むら」や「いえ」の変動ないし転換から解体へと変わっていき、さらに土地、環境、農村計画など微妙に拡大してきています。このようにして現代の農村研究で「むら」や「いえ」に必ずしもこだわる必要はないかもしれませんが、現代の農村を正確に捉えるためには古い時代の「いえ」や「むら」

の理論では合わなくなっているのは当然といえましょう。それにもかかわらず、「むら」と「いえ」の視点をまったく捨て去ることはよくないと思います。というのは現代の日本農村は古い「むら」や「いえ」が桎梏となって飛躍できないでいるといえるかもしれません。若い人が農業や農村にとどまらなくなったのは農政、農業そして経済の面が要因になっていることはいうまでもありませんが、社会的な面すなわち古い「むら」や「いえ」が現代社会に合わなくなっていることも注目する必要があるかと思えます。「いえ」や「むら」の現実から目を背けるのではなく、大きな社会の流れにそれらをどのように適合させていくか、どのように建設していくべきか、未来の「いえ」や「むら」はどうあるべきかというような問題は、私どもの学会のもっとも基本的な問題のひとつであると思えます。

私もかつて「いえ」と「むら」をやめて「家族」と「地域社会」に変えて研究すべきだと主張したことがあります（拙著『農村の家族と地域社会』）。しかしその後少し反省して「いえ」と「むら」の理論を放棄するのではなく、新しい農村を築き農村の活性化を図っていくためには古い「いえ」と「むら」とを改めて、新しい「むら」と「いえ」を探求していくべきではないかと思うようになってきました。むしろ「いえ」と「むら」を土台としてそこからさらに飛躍していくべきだと思います。私どもの学会の原点であり、ときどき振り返り、帰っていくことのできる「ふるさと」をもっていることは幸せなのかもしれません。

今回図らずも磯辺前会長のあとを受け継いで浅学の私が会長を引き受けることとなりました。この学会は経済学、経済史、社会学、民俗学、農村計画学その他多くの学問分野を含んだ複合学会ではありますが、また日本の農村も多くの問題を抱え、悩んでいます。この意味で私どもの学会の対象とすべき問題は無限というほど多く、課せられた責任と使命は重いと思えます。会員諸氏のご協力でこの学会を運営し、さらに発展させていきたいと思えます。

亀岡大会（第43回）印象記

村落研究の「多様化」と、研究手法の模索

中国農業試験場 飯坂正弘

1995年の大会は、11月17日のエクスカージョンから始まった。美山町の茅葺家屋保存地区もそうであるが、亀岡市犬甘野地区における集落営農活動の見学は、その時点ですでに私にとっては「村研」らしからぬ印象を受けた。それは逆に言えば村研に参加している研究者が、これまで起こってきた、あるいは現在起こりつつある村落の変動に対し、それを捉えるための方法・枠組みを模索していることの現れであると受け止められた。

自由報告の内容も、セッションいくつとは区切りながらも、もはやそうした区切り方では対応できないほどバラエティに富んだものであった（レベルはともかく）。文量の制限もあり、そのすべてをフォローはできないが、「村研」といえば、徹底した村落内フィー

ルドワークに基づいたモノグラフ的な発表が多いと思いこんでいた私にとっては、玉先生、斉藤先生、渋谷先生の報告は、ある意味で新鮮に思えた。高木先生・森田先生の報告は、歴史人口学の方法と現代栄養学も援用された研究方法として、大学院で人口学を学んだ者としては個人的に非常に興味深いものであった。

その一方で高山先生、加藤先生の報告は、農業就業人口の減少（担い手不足？）、過疎化・高齢化の終末段階に近づきつつある山間村落における農地保全のあり方を考えるうえでも、重要な点を指摘されたように思える。

矢野先生の諏訪の出稼ぎ杜氏に関する報告は、これまで農閑期の収入確保のために単純労働に従事するといった枠組みで捉えられがちであった『出稼ぎ』に対する研究者のイメージも少し変えざるを得ない内容ではなかったか。もちろん現時点ではそのあり方も変わったではあるが、厳しい条件下に居住し農業を営む者にとって、村落内における過当な競争は、一歩間違えば共倒れ、村落の崩壊につながる。それを村外における杜氏への出世競争に置き換え、その地位を村内における社会的地位に反映させる方法は、厳しい高地に生きる農民のある種の知恵ではなかったか。そんなことを考えた。

テーマセッション「村落研究と環境問題…」については、生態学などこれまで「他分野」にあった方々の報告があり、学会としては新鮮であったかもしれないが、農業試験場に勤める者にとっては申し訳ないが既知の内容であった。しかしたとえば今日の日本農業における化学肥料や農薬、あるいは資材も含むかもしれないが、化学合成物質の多量使用は、その効果や安全性を論ずる以前に海外から問題視されており、「そこまでいろいろ化学物質に頼らなければ日本の農業が成り立たないのなら、もはや日本では農業をするべきではない。われわれが環境に優しい方法で安い農産物を提供しよう」という農産物輸出のオフレコ発言も飛び出すほどである。そうした問題提起に対し、日本の研究者や農業者はどう応えていくのか。・・・答えは村落の中にあるような気がする。

藤村先生の自らの調査経験のなかから導きだされた「他者から見られている状況」（まなざし）は、村落内における所有関係のみならず、研究者の社会（学界とでも呼ぶべきであろうか）にも通じる概念である。引用という他者から見られている状況が、学界におけるその人の研究分野の所有を認知することにつながる。裏を返せば、引用という他者から見られている状況を作らないことによって、学界からその研究者の存在を消すこともできるわけである。

話が脱線してきたので、この辺で稿を閉じる。最後に、報告のキャンセルがあったことは、事情は知らないが、それが大学院生であっただけに余計残念である。

亀岡大会（第43回）印象記

第43回大会見聞記 —紅葉の亀岡ハイツから—

宮城学院女子大学 菅谷よし子

1. 合宿形式の継続

どの学会も、その始まりは数名からなる研究会であった。仲間が集い、同じ釜の飯を食い、そして温泉にもつかりながら、本来の目的である研究報告もするという古きよき伝統

がつくりあげられていったのも不思議ではない。私が所属する家族社会学セミナーもやはり。しかし、学会と名称を変え、参加者も増えるにつれて、合宿形式は続けられなくなった。

ここ、亀岡ハイツは静かな場所であった。黄色い落葉の先に合宿部屋がある。村落研究学会は合宿形式を守り続けている。報告会場は一つに集中させられて、分科会もない。参加者は皆同じ報告に耳を傾ける。すべての報告が全員に共有される。この合宿形式のもつメリットは大きい。しかし、若い参加者が増えれば個人主義の願望も強まる。参加者の輪を拡げながら、合宿形式を続けていくことは、今後かなりの困難を伴うのではないかと思われた。

2. 実証主義の伝統

報告者からは、分厚い資料が配布される。大学院の研究会さながらだ。報告時間内に説明し終えなかった部分も、資料を読みさえすればよくわかるようになっていく。

「粘っこく調査をして、しつっこく報告するんだ、この学会はな」

久しぶりにあった先輩が誇らしげに言う。

報告者が対象とする時代の幅は広く、問題関心も多岐にわたるものの、報告者の基本姿勢は、先輩の言うとおり、粘っこい実証主義であった。私自身も、フィールドに出ることを欠かした年はない。しかし、ひとりで歩ける範囲は限られている。報告を聞くたびに、日本の村落も多様なのだと改めて思った。

セッションが、一つのテーマや地域に限定された報告だけで構成されていけば、参加者は頭の整理がしやすい。現実には、ある報告から次の報告へと頭の切り替えに忙しい。しかし、詳細な事例報告に耳を傾ければ、自らのフィールドワークへのヒントがいくつも得られるのは楽しいことであった。さらには、全員参加の討論は成立しがたいとはいえ、報告のあとに、円陣でも作って自由に話し合えたらよいのだが、とも思った。

3. 老いも若きも

報告者は若者だけではない。ベテランというか、年長世代というか、人生の諸先輩たちも豊富な経験を身にまとい、報告台に立つ。他の学会ではあまり見られない光景だ。定年になっても若い研究者と交流する場がある、これを学会の伝統としていきたいものである。

4. 国際交流への道

テーマ・セッションは環境問題であった。今後の展開が期待される分野でありながら、多少、国際的視野に欠ける点もあった。大会の基調は、日本の村落に残る伝統の強さにあるということであって、今後必要とされるのは、それに加えて、国際的観点に立つ農村社会の分析だとの思いが消せなかった。

しかし、それは杞憂であった。大会直前に中国・北京で開催された第6回アジア社会学会議から帰国したばかりの会員から、参加者の珍道中ぶりが話された。夜の会合は笑いの渦であった。国際交流への道はすでに確立されているのであった。

今夏、ルーマニアのブカレストでは、また会員の珍エピソードが生まれるだろうか。IRSAへの参加についての話し合いでも、老いも若きも楽しそうに企画を出し合う。このバラエティに富んだ会員が、国際交流の場に出ていくことで、大会自体もますます楽しく、稔り豊かなものとなることであろう。

1995年度第5回理事会

日時 1995年11月17日（金）夕刻

場所 京都府亀岡市／京都レクリエーションセンター亀岡ハイツ

出席者 （理事）磯辺，安原，鳥越，杉岡，中道，熊谷（松田），渡辺（正），細谷，柿崎，河村，清水，岩本，渡辺（安），高橋（明），吉沢，北原，
（ジャーナル編集責任者）長谷川（昭），（事務局）大内，高田

1 報告事項

1 1995年度事業報告，会員動向

2 会計報告

3 研究委員会報告

4 国際交流委員会報告

5 学術会議関連報告

6 編集委員会報告

a. 「村研年報」編集委員会報告

b. 「村研ジャーナル」編集委員会報告

以上，報告事項（総会報告に同じ）について，了承した。

2 議題

1 1996年度事業計画，予算案について

事務局より提案があり，了承し総会に提案することとした。

2 次期事務局について

事務局より，東北大学の細谷会員にお願いしたい旨提案があり，了承し総会に提案することとした。

3 次期大会開催について

事務局より，次期大会のお世話を，山形大学の長谷川会員にお願いしたい旨提案され，了承し総会に提案することとした。

4 総会における理事の改選手続きについて

・被選挙権を有するもの，および投票手続きについて確認した。

・投票による選出結果の発表日程，新理事会の日程，議題について，確認した。

5 学会賞の設置について

学会賞の設置について，会長からあらためて提案と説明があり，審議に入った。内容は総会提案の通り。賛成意見として，若い研究者の業績を学会として評価し研究を奨励したい，学会賞は当人の研究業績として社会的に通用する，村研が学会として形を整えるには学会賞も必要である，候補者の選定が困難でも公正で客観的な評価に向けて努力すればよい，

などがでた。反対意見として、これまでの学会の自由な議論の雰囲気は損なわないか、候補者の選定は実際にはきわめて困難となろう、学会賞についてはいまだ会員の間で合意ができていないとは思えない、などがあつた。投票の結果、賛成12、反対4で原案を承認した。学会賞の詳細については今後の検討課題とし、原案は総会に提案することにした。

1995年度日本村落研究学会総会

日時 1995年11月18日(土) 夕刻
場所 京都府亀岡市/京都レクリエーションセンター亀岡ハイツ
議長 大沼盛男

I 報告

1 1995年度事業報告、会員動向(大内事務局長)

(1) 理事会の開催

第1回(1994年11月3日、南知多町総合体育館会議室)

副会長の選任、学会賞の取扱い、「村研ジャーナル」への広告の掲載、慶弔規定、購読会員と機関会員の勧誘、本年度大会のテーマ・セッション、中国農村社会学会への参加。

第2回(1994年12月10日、明治大学大学院)

南知多大会の反省、研究委員会の活動(本年度大会、インタレスト・アンケート、共同研究推進体制の整備、地区研究会)、編集委員会(ジャーナル、年報)、国際交流委員会(IRSA、ARSWG)、会費長期滞納による退会会員、学会賞。

第3回(1995年4月22日、明治大学大学院)

本年度大会、研究委員会(大会報告、地区研、インタレスト・リスト、小グループ活動)、編集委員会(年報、ジャーナル)、国際交流委員会(中国農村社会学会、世界農村社会学会議)、学会賞、会費滞納者。

第4回(1995年9月9日、農村生活総合研究センター)

研究委員会(大会運営)、編集委員会(年報、ジャーナル)、国際交流委員会(ルーマニア大会のテーマ設定)、学会賞、理事選挙における被選挙権。

第5回(1995年11月17日、京都レクリエーションセンター亀岡ハイツ)

総会準備、学会賞、理事改選手続きについて。

(2) 地区研究会の開催

北海道地区研究会（1994年12月17日，北海道大学文学部研究室，11名）

報告者：大野晃 「西表島の自然と人間－「共存」の可能性を求めて－」

瀬戸内地区研究会（1995年4月8日，香川大学セミナー・ハウス，13名）

報告者：狩野寿夫 「現代農村における「いえ」と「むら」に関する一考察」

：片岡弘勝 「讃岐地域住民の生涯学習要求に関する調査研究－東讃の地域づくり課題を中心に－」

：野崎優加 「発展途上国の農村部における住民参加型プログラムの取り組みとその意義」

中部・近畿地区研究会（1995年5月27日，京大会館，20名）

報告者：嘉田由紀子 「村落社会と環境問題」

：渡辺紹裕 「農業用水利用の変化と水管理組織」

九州地区研究会（1995年6月3日，熊本県立大学会議室，9名）

報告者：山田忠昭 「「日本一づくり運動」以後の熊本の地域づくり」

関東地区研究会（1995年6月3日，明治大学大学院，21名）

報告者：小田切徳美 「日本農業の中山間地問題－「西日本」型中山間地を中心にして－」

：市田知子 「ドイツの中山間地問題－バイエルン州を中心に－」

東北地区研究会（1995年7月15日，東北学院大学土樋キャンパス，18名）

報告者：岩本由輝 「タイ農村の現状－家族と宗教のあり方を中心に－」

：小林一穂 「中国河北農村の現状－家族生活を中心に－」

(3) 研究通信の発行

第178号（1995年1月30日）

第179号（1995年4月15日）

第180号（1995年8月5日）

第181号（1995年10月11日）

(4) 会員数

昨年度大会時の正会員数 358名

今年度会員増加数 16名

（内訳：新入会員22名，退会会員2名，逝去者4名）

今大会時の正会員数 374名

その他 購読会員数 5名

2 会計報告（高田会員），監査報告（市田会員）

事務局より，1995年度の会計収支決算案について説明があった。会計監査の市田会員より，帳簿，書類とも完備されているとの報告があり，別掲のとおり決算案が承認された。

3 研究委員会報告（河村委員長）

- ・大会報告数が増える傾向にあり、今後の大会においては日程の調整が課題となる。
- 今大会のテーマセッションでは自然科学分野からの報告も生まれ、学際的な方向は大切にしたい。
- ・学会員の研究活動の活性化に関して、会員の関心分野や研究フィールドの調査をどう実施するか（関心分野のくくりかたや調査の方法）は今後の課題である。共同研究が今後根づいていくことが期待される。地区研究会は活性化してきており、実績にあらわれている。
 - ・全国に散らばる委員による研究委員会の運営は難しい点があり、工夫が必要である。

4 国際交流委員会報告（鳥越委員長）

- ・IRSAの第9回会議が、1996年7月21日から26日に、ルーマニアのブカレストで開かれる。参加を呼びかけたい。
- ・IRSAのアジア地区の単位となる「アジア農村社会学会」の準備会が持たれており、村研も代表機関として参加している。中国も積極的であり、正式なものになる方向である。

5 学術会議関連報告（安原副会長，高橋理事）

現在、社会学研連委員を村研からは出していないが、今後、日中社会学会から出ている委員と交替し、村研から委員を出す予定である。村研としては鳥越会員を推薦したい。

6 編集委員会報告（吉沢委員長，北原年報編集責任者，長谷川ジャーナル編集責任者）

- ・今年度「村研年報」（第31号）は、本日刊行された。「村研ジャーナル」は、今年度第2号と第3号を刊行した。現在、第4号を編集集中である。両者の購入拡大をさらにお願したい。
- ・「年報」の原稿については、3月に構想を出してもらった。また、英文レジメを付けるようにした。今後、特集テーマの設定をどうするか、今は依頼原稿のみであるが自由投稿の論文の余地をどう確保するか、原稿に対する編集委員の責任のもちかた、が課題となる。
- ・「ジャーナル」には多数の応募を期待したい。

II 議題

1 1996年度事業計画，予算案について

1996年度は、会員名簿の作成が予定されること、地区研究会が6カ所に増えること、事務局の交通費をとくに計上したこと、ジャーナルを2回、研究通信を4回発行の予定であることなどが事務局より説明され、別掲の1996年度予算案が了承された。

2 次期事務局について

次期事務局について、東北大学の細谷昂会員にお引き受けいただく案が事務局より提案され、了承された。細谷会員より受諾の挨拶があった。

3 次期大会事務局について

次期大会事務局について、山形大学の大川健嗣会員にお引き受けいただく案が事務局より提案され、了承された。

4 学会賞について

別掲の「研究奨励賞の設置について（案）」が、理事会より提案され、会長が説明を行な

った。さらに今後も詳細を検討することとして、学会賞の設置が了承された。

Ⅲ 理事の改選

- 1 選挙管理委員として、黒崎会員、神田会員、永野会員が選出された。
- 2 10名連記の投票が総会出席会員によって行なわれた。投票者総数93名。
(10名の新理事が選出され、総会後の懇親会席上にて報告された。)

※ 選出された新理事

相川良彦、池上甲一、大野晃、大川健嗣、嘉田由紀子、小林一穂、徳野貞雄、長谷川昭彦、東敏雄、松岡昌則。計10名(五十音順)。

Ⅳ その他

磯辺会長より退任の挨拶があった。

研究奨励賞の設置について(案)

理事会

- 1 賞の趣旨 : 村落研究に新しい知見を加え、本学会の研究水準を高めて、今後のさらなる発展が期待できる会員の業績にたいして、研究を推奨する目的をもって、学会賞として研究奨励賞を贈る。
- 2 賞の名称 : 日本村落研究学会研究奨励賞。
- 3 賞の対象 : おおむね前年に公刊された会員の著書または論文(共著を含む)。
- 4 受賞者 : 複数の会員の推薦により、そのなかから若干名を選ぶ。
原則として40歳代程度まで。
- 5 選考 : 理事会に選考委員会を置く。
選考委員会は、毎年度、委員を更新する。
- 6 表彰 : 賞状および副賞。

1995年度決算
(1994.11.1.~1995.10.31.)

1. 収入の部

科 目	94年度決算	95年度予算	95年度決算	予算-決算
前年度繰越金	770,177	1,508,614	1,508,614	0
会費収入	2,071,000	2,082,000	1,804,000	278,000
村研ジャーナル販売代金	184,360	336,000	344,640	-8,640
利息	5,136	5,000	17,345	-12,345
雑収入	34,500	80,000	80,000	0
計	3,065,173	4,011,614	3,754,599	257,015

2. 支出の部

科 目	94年度決算	95年度予算	95年度決算	予算-決算
村研ジャーナル印刷費	628,135	1,256,270	1,224,639	31,631
同表紙版下	35,000	0	0	0
同追加購入	16,920	38,400	70,390	-31,990
同郵送料	101,810	191,700	182,830	8,870
「会員名簿」印刷費	59,740	0	0	0
研究通信等印刷費	137,881	140,000	184,139	-44,139
連絡通信費	171,450	200,000	259,840	-59,840
編集委員会費	26,057	50,000	10,000	40,000
研究委員会費	0	20,000	0	20,000
会議費等	11,075	20,000	1,600	18,400
地区研究会費	40,000	50,000	50,000	0
交通費補助	260,000	300,000	300,000	0
消耗品費	34,144	40,000	58,297	-18,297
事務謝金	20,000	20,000	0	20,000
事務局交通費	1,140	10,000	0	10,000
国際交流費	0	20,000	24,000	-4,000
雑支出	13,207	20,000	20,624	-624
小計	1,556,559	2,376,370	2,386,359	-9,989
次年度繰り越し金	1,508,614	1,635,244	1,368,240	267,004
合 計	3,065,173	4,011,614	3,754,599	257,015

1996年度予算
(1995.11.1~1996.10.31)

1. 収入の部

科 目	95年度決算	96年度予算	備 考
前年度繰越金	1,508,614	1,368,240	
会費収入	1,804,000	2,178,000	6,000×341+4,000×33
村研ジャーナル販売代金	344,640	336,000	168,000円×2回
利息	17,345	17,000	
雑収入	80,000	80,000	村研ジャーナル広告料等
計	3,754,599	3,979,240	

2. 支出の部

科 目	95年度決算	96年度予算	備 考
村研ジャーナル印刷費	1,224,639	1,256,000	628,000×2回
同表紙版下	0	0	
同追加購入	70,390	57,600	960円×30冊×2回
同郵送料	182,830	201,960	270円×374人×2回
「会員名簿」印刷費	0	60,000	
研究通信等印刷費	184,139	180,000	45,000×4回
連絡通信費	259,840	200,000	
編集委員会費	10,000	50,000	年報編集及びジャーナル編集
研究委員会費	0	20,000	
会議費等	1,600	20,000	
地区研究会費	50,000	60,000	10,000×6地区
交通費補助	300,000	300,000	
消耗品費	58,297	40,000	
事務謝金	0	20,000	
事務局交通費	0	100,000	
国際交流費	24,000	20,000	
雑支出	20,624	20,000	
小計	2,386,359	2,605,560	
予備費	1,368,240	1,373,680	
合 計	3,754,599	3,979,240	

1996年度第1回理事会

日時 : 1995年11月19日(日) 12時半～13時半

場所 : 京都府亀岡市/京都レクリエーションセンター亀岡ハイツ

出席者 : (理事) 相川、青柳、荒樋、池上、大沼、嘉田、小林(一)、酒井(恵)、坂本、庄司、徳野、永野、長谷川(昭)、東、松岡、松村、矢野、山本(正)
(事務局) 細谷、水上、山田

1. 新理事、監事(会計監査)の決定

推薦の新理事については、後日、当日欠席の候補者に承諾をえることとして、次のように決定した。

青柳みどり、荒樋豊、大沼盛男、黒柳晴夫、酒井恵真、坂本喜久雄、庄司俊作、永野由紀子、松村和則、矢野敬生、山本正和。計11名(五十音順)。

監事は、前事務局の高田滋となった。

2. 会長の選任

会長に、長谷川昭彦理事を互選した。

3. 副会長の選任

副会長に、東敏雄理事を互選した。

4. 研究委員長の選任

研究委員長に、相川良彦理事を互選した。

5. 国際交流委員長の選任

国際交流委員長に、嘉田由紀子理事を互選した。

6. 編集委員長の選任

編集委員長に、庄司俊作理事を互選した。

7. 学会奨励賞について

総会での学会奨励賞設置の承認を受け、運用など詳細を検討するためのワーキング・グループを構成することになった。ワーキング・グループのメンバーについては、次回理事会までに、会長と副会長が原案を作成する。

8. 各委員会の構成

各委員会および学会奨励賞ワーキング・グループのメンバーについては、次回の理事会までに各委員長が連絡をとりあい、案を持ち寄ることになった。原則としてすべての理事が委員会およびワーキング・グループのいずれかに所属するという方針が確認された。

・次回理事会日程

第2回理事会は1996年1月6日(土)午後1時半より東京にておこなうことが了承された。

1996年度第2回理事会

日時 : 1996年1月6日(日)13時半~16時半

場所 : 中央大学駿河台記念館 475号室

出席者 : (理事)相川、青柳、荒樋、池上、大川、大野、嘉田、黒柳、小林(一)、庄司、徳野、永野、長谷川(昭)、東、松岡、松村、矢野
(事務局)細谷、水上

1.各委員会委員の選出

研究委員会、『村研年報』編集委員会、『村研ジャーナル』編集委員会、国際交流委員会、学会奨励賞ワーキング・グループの構成メンバー、および地区担当理事の選出をおこなった。

第2回理事会ののち、欠席した理事や理事以外の候補者への連絡・了承をえて、下記のように決定した(下線は理事)。

A:研究委員会

相川良彦(委員長)、青柳みどり、荒樋豊、池上甲一、大友由紀子、大野晃、嘉田由紀子、小林一穂、徳野貞雄、松岡昌則、松村和則

B:編集委員会

庄司俊作(編集委員長)

B-1:年報編集委員

庄司俊作(責任者)、秋津元輝、蘭信三、大川健嗣、大沼盛男、大野晃、永野由紀子、藤井勝、松村和則、山本正和

B-2:ジャーナル編集委員

熊谷(松田)苑子(責任者)、青柳みどり、荒樋豊、磯辺俊彦、大内雅利、北原淳、小林一穂、酒井恵真、高橋明善、武田共治、東敏雄、矢野敬生

C:国際交流委員会

嘉田由紀子(委員長)、青柳みどり、河村能夫、黒柳晴夫、小林一穂、坂本喜久雄、高橋明善、鳥越皓之、永野由紀子、熊谷(松田)苑子

D:学会奨励賞ワーキンググループ

池上甲一(委員長)、市田知子、徳野貞雄、松岡昌則

E:地区担当理事

酒井恵真(北海道)、佐藤直由(東北)、大友由紀子(関東)、山本英治(関東)、黒柳晴夫(関西・中部)、立川雅司(中国・四国)、坂本喜久雄(九州)

2.研究委員会の本年度活動予定について

相川研究委員長より、96年度村研大会のセッション・テーマについて、候補テーマおよび候補コーディネーターの提案がなされた。15頁の記事を参照。

3. 編集委員会の本年度活動予定について

①『村研年報』（第32集）の編集について

庄司年報編集責任者より、特集の編集方針、タイム・スケジュールの提案があり、了承された。16頁の記事を参照。

②『村研ジャーナル』の編集について

長谷川ジャーナル編集責任者より、報告と提案があり、了承された。17頁の記事を参照。編集後記を持ち回りで執筆する、また、校正については1回筆者校正をおこなうといった点を次期編集委員会への申し送り事項とすることが報告された。

4. 国際交流委員会の本年度活動予定について

嘉田国際交流委員長より、国際農村社会学会（IRSA）との連携およびアジア農村社会学会準備会への参加を進めていくことが報告され、了承された。18頁の記事を参照。

5. 学会奨励賞ワーキング・グループの活動予定について

池上委員長より、次回の理事会にて、学会奨励賞の詳細について原案を提出する予定であることが報告された。19頁の記事を参照。

6. 1996年度大会について

関連する諸学会の大会日程と重ならないよう村研大会の日程を調整する必要のあることが提起され、了解された。23頁の記事を参照。

7. 1995年度大会事務局からの寄付の申し出について

1995年度大会事務局より、大会決算の残高を学会に寄与したいとの申し出があり、了承された。この寄付金については、1995年度大会事務局の意向に従い、国際交流のための支援に用いることが承認された。

・次回理事会日程

第3回理事会については、1996年4月27日（土）の午後に仙台にて開催の予定。

研究委員会関連の決定事項

研究委員長 相川 良彦

96年度村研大会は10月下旬山形において開催する（開催校：山形大学、開催責任者：大川健嗣会員）。96年度山形大会のセッション・テーマは、「環境保全型農業の現状と展望—都市と農村との連携再生に向けて—」（仮案）、コーディネーターは徳野貞雄会員（広島県立大学）、と決定した。メイン・テーマ自体が現代焦点の課題であると同時に、95年大会テーマ「環境」とつながり、議論を深め得ること、副題は地域問題への展開を期待して付けられた。次に、その年秋の大会セッション・テーマを前年暮れ乃至その年の

初めに決めるというスケジュールでは準備期間が短すぎるとの反省から、翌97年大会についても当理事会で大枠を決めることにした。協議の結果、97年大会セッションのメイン・テーマを「中山間地問題」、副題としては「担い手問題」「国際比較」「村づくり」「高齢化」「地域計画」など幾つか考えられるので、今後検討していくこととした。コーディネイトを大野晃（高知大学）、松岡昌則（秋田大学）両会員へ依頼した。

また、研究委員長としては、数年のあいだ中断していた研究委員会主催の関東地区での研究会を、9月下旬～10月初旬に大会テーマに呼応するようなテーマ設定のもとに再開したい、と思っている。それによって大会テーマへの関心を引き起こし、周りの雰囲気が多量とも盛り上がることを期待している。なお、96、97年大会セッション・テーマとコーディネーターは上記のように理事会ベースで決定したが、望むらくは個々の会員の発意によりテーマが提起され、コーディネイトもされるべきであろう。今春予定の「会員名簿」更新のための調査時に各自の研究領域インタレスト調査と98年大会のテーマ及びコーディネーター募集も行うので、積極的に応募していただきたい。

『年報』編集委員会からの報告

編集委員長 庄司俊作

(1)1995年度大会での理事改選に伴って、委員長をはじめ編集委員が別記のように大幅に入れ替わった。そのため、同大会日程の遅れ等とあいまって、『年報 村落社会研究』第32集の編集作業が例年よりやや遅れていた。しかし、1月初旬には執筆予定者がほぼ全員決まり、目処がついた。

(2)『年報』の特集に関しては、以下のような方針で臨んでいる。

第1に、1995年度大会のテーマ・セッション「村落研究と環境問題にかかわる課題発掘」を特集テーマとする。そして、「環境問題が、村落研究といかに切り結ぶことができるのか、その糸口を探り出し、今後の研究の深化を図るための第1歩とする」（嘉田由紀子「1995年度大会テーマ・セッションへのお誘い」）という問題意識に立脚し、編集原稿を集める。

第2に、1995年度大会報告から可能なかぎり原稿を集める努力をするとともに、環境問題と村落社会との関連に対する観点を重視するなど、当学会の取り組みにふさわしい成果とするため、広範な会員の研究蓄積を中心に編集する。

第3に、「環境」というカテゴリーとともに、地帯比較、地帯別接近をもう一つの柱として特集の構成を考える。地帯としては、都市近郊地帯、(中)山間地域、東海平坦・東北平坦地帯などに注目する。

1995年度最後の理事会で、『年報』は編集委員会がもっと裁量を発揮して編集に当たった方がよいという意見が出された。当学会の現在の運営状況を考えると、大会のテーマ・セッションをもとに特集の編集を行なう従来の方法を一気に変更することは難しいと思われるが、第32集は結果的に、8名の特集原稿執筆予定者のうち4名は、大会報告者等以外の方に独自のテーマで執筆をお願いすることになった。また、過去の実績に照らして、第32集は300頁前後を目安に編集する。従って、分量的に特集依頼原稿で目一杯であり、今回も懸案の自由投稿は見合わせる。

(3)分野別研究動向の執筆者は、以下の方々である。

①史学・経済史学・・・宇佐美英機氏 〒525 滋賀県草津市西淡川2-6-35

②経済学・農業経済学・・・安藤光義氏 〒300-03 茨城県稲敷郡阿見町阿見3998

茨城大学宿舍 501-12

③社会学・農村社会学・・・蘭 信三氏 〒811-01 福岡県粕屋郡新宮町湊坂3-9-2

④外国研究(アジア中心)・・・北原 淳氏 〒651-11 神戸市北区泉台3-38-11

会員の方々は、各成果を関連分野の執筆者の方にお送りください。

(4)1996年度大会は昨年度より日程が早まりそうである。年報は大会までの刊行が義務づけられおり、これまでの取り組みと残された期間を考えると、今後編集作業を一層迅速に進めていくことが必要である。原稿の締め切りは、特集が5月末、研究動向は6月末、である。原稿依頼に際しては、執筆者の方々にかなり無理なお願いを聞き入れていただいた。今後も協力のよろしきを得て、『年報』が予定通りに出版できることを目ざし、努力したい。

村研ジャーナル編集委員会より原稿の募集について

村研ジャーナル編集代表幹事 熊谷(松田)苑子

村研ジャーナル編集委員が新しく選出され、私が代表幹事の役をさせていただくことになりました。よろしくごお願い申し上げます。

『村研ジャーナル』第4号の編集作業は前編集委員会の責任でほぼ終了しており、第4号は4月上旬に、第5号は9月初旬に刊行の予定です。つきましては、第6号と第7号に掲載する論文および研究ノートの原稿を以下のように募集しますので、ふるってご応募ください。

1. 投稿申込期日：第6号は96年4月15日まで、第7号は96年10月下旬まで。

2. 申込事項：任意の要旨に以下の事項を明記して編集委員会(編集代表幹事 熊谷(松田)苑子)あてに申し込んでください。

①氏名 ②郵便番号・住所・電話番号 ③所属機関・身分・電話番号 ④論文と研究ノートなどの区分 ⑤論文あるいは研究ノートの題目 ⑥論文あるいは研究ノートの概要 ⑦使用ワープロ類の機種とそのソフトの名称

3. 申込先：〒214 川崎市多摩区宿河原5-25-11-601 電話044-922-7742 熊谷(松田)苑子

4. 編集日程

	第6号	第7号
投稿申込締切	1996年4月15日	1996年10月下旬
投稿原稿締切	9月中旬	97年4月上旬
採否決定と返却	11月中旬	5月中旬
再提出	12月上旬	6月中旬
最終編集	12月下旬	6月下旬
農文協へ原稿渡し	97年1月下旬	7月初旬
刊行、発送	3月下旬	9月初旬

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員長 嘉田由紀子

国際交流委員会は発足してまだ年月も浅い、若い委員会です。今回の理事の交代に伴う委員会の改組では、これまでの活動を継承しながら、地区ごとの連絡代表ということで、次の理事会員に委員をお願いすることになりました。地区別委員は、小林一穂（東北）、青柳みどり（関東）、黒柳春夫（中部・北陸）、永野由紀子（中国・四国）、坂本喜久雄（九州）、の方たちです。またこれまでの活動の継承を図るという意味で非理事のなかから、熊谷（松田）苑子、河村能夫、高橋明善、鳥越皓之の方たちに委員をお願いすることになりました。

この委員会の活動は、（１）国際農村社会学会（IRSA）との連携、（２）アジア農村社会学会のたちあげ準備、（３）一般的な国際交流の企画・推進、という３点があると前任の鳥越さんから引き継いでおります。

（１）については、今年７月２２日から２６日にかけて、ルーマニアのブカレストでひらかれる「第９回国際農村社会学会」が当面の話題となるでしょう。共通テーマは「地球の明日にむけての農村の潜在力」。案内パンフレットでは、「これまで農村については、＜危機＞＜衰退＞＜問題＞などという形容詞が多く付されてきた状況を脱皮して、農村の資源や行動体系などに学ぶなかで、次の世紀の生き方を模索しよう」と呼びかけがなされています。すでに３０名ほどの方が参加の登録を終え、２０数名の方は論文発表を予定しています。発表予定のテーマは、日本農村の家族問題、農村女性問題、環境問題など多岐にわたっています。日本としての独自のセッションをくむことができるかどうかは、現在検討中のようです。

（２）については、東アジアでの農村社会学者の連携組織をつくろうということで、少しずつ準備が進んでいるようです。

（３）については、日常的な活動こそが力となるのではないのでしょうか。世界中がまさにインターネットで結ばれる時代になり、意識としても、具体的なコミュニケーションプロセスとしても、国際的な流れに否応なくとりこまれてしまいます。パソコン通信を手にすることができた８０年代後半には、E-mailのような通信手段がこれほど急速にひろまるとは想像していませんでした。でも逆に、なんでそんなに早く意見をやりとりして忙しくさせられるの、という疑問も持ちつづけています…。脱線でした。

これから２年間、不慣れな役を全うできるか不安でもあります。みなさん、どうかよろしく。

「学会奨励賞ワーキング・グループ」からの報告

委員長：池上 甲一

95年の京都大会総会において、かねての宿題であった「学会奨励賞」を設けることが承認された。「学会賞」の創設をめくっては、94年の南知多大会以来、賛否両論の活発な議論があった。当時、「これほど盛り上がりを見せる総会というのは珍しい」と、ある会員が感慨深げに語っていたことが思い出される。

反対の主張は、おおよそ以下のように要約できるだろう。第1に、「学会賞」は大なり小なり「事大主義」的な性格をもつ。そのような「学会賞」をいまさら村研にもちこむことの必然性が不明確であり、さらに村研の「村社会」的な良さを損なうことになりかねない。第2に、「学会賞」の創設により、悪しき権威主義を育むおそれなしとしない。第3に、だれが「評価」するのかという問題がある。会員の関心領域は、学会名簿に記載されているインタレスト・グループからもわかるようにきわめて多彩であり、それゆえ適切な「評価」を行いうるのか、疑問が残る。

他方、賛成の論拠はおおむね以下のとおりであった。第1に、「学会賞」に妙な権威づけをせず、独創的・斬新な研究を奨励するという性格づけをすれば、「学会賞」は村落研究の発展に貢献しうるだろう。第2に、そうした性格の「学会賞」は、とくに若手研究者の村研に対するインセンティブを付与するひとつの手段となることが期待される。第3に、大学・研究機関の採用・昇進人事などの際に、学会賞の位置づけが高くなっており、村研としてもそのことに対応する必要があるはしないか。多分に実利的ではあるが、現実にもそうした動きがある以上、この実利性を無視するわけにもいかないだろう。

以上のような議論を経て、95年の総会で「学会賞」ではなくて「学会奨励賞」の創設が決まったわけである。ただし、95年総会では奨励賞としての性格とその創設が決まっただけで、その運用システムとルールづくりは次回大会に持ち越された。そのためのワーキング・グループが臨時に設けられ、取りまとめ役としてのおはちが私に回ってきた。ほかの委員には、理事から徳野貞雄、松岡昌則の両会員、理事以外から市田知子会員に加わっていただくこととし、1月の第2回理事会で承認を受けた。このワーキング・グループの任務は、「学会奨励賞」の「運用規則」と「細則」の原案を作り、次回大会に提案することである。

その際に、これまでの議論の経過を十分に踏まえて、権威づけや「選考」による会員の差別化につながらないように留意すること、あくまでも村研に対する研究奨励の意味をもたせること、できるだけ弾力的な運用が可能となるように、ゆるやかな最低限のルールづくりを目指すこと、とくに若手研究者の研究インセンティブになるように配慮すること、の4点を基本方針としたいと考えている。

原案の成文化はこれからの作業である。当面、関連他学会の学会賞規則類を集め、それを参考にしつつ、上記の基本方針を反映する「運用規則」と「細則」の原案を作りたい。さしあたり、原案を4月の第3回理事会に提案する予定にしている。本件に関して、意見や提案があれば、3月下旬位までに池上宛てにお送り下さい。

九州地区研究会のお知らせ

1. 報告者 木下謙治氏（九州大学文学部）
2. 報告テーマ 「村落研究をめぐる若干の問題」
3. 日時・会場ともに未確定ですが、3月下旬に九大文学部あるいは中村学園大学の研究室を予定しています。
4. 連絡先

1. 九州大学文学部社会学研究室

2. 坂本 喜久雄

勤務先

なお九州地区の会員の皆様、関係者の方々には、日時、場所が決定次第ご連絡いたします。

その他の地区研究会について

関東地区研究会は、3月13日、明治大学において開催されましたが、この『通信』による連絡では間に合いませんでしたので、関東地区の会員の方々に葉書でご連絡申し上げました。

その他の地区研究会については、追って『通信』に掲載いたします。

(事務局)

第8回 農村女性についての研究会

東北大学大学院
情報科学研究科 会議室
1996年1月27日(土)

参加者(五十音順、敬称略)

安孫子麟、阿部和江、伊藤純、加藤眞義、小林一穂、佐久間政広、永井彰、仲山彩子、
細谷昂、水上英徳、三須田善暢、柳谷慶子

報告「農業生産組織と女性---宮城県角田市古豊室地区の事例---」

東北学院大学 佐久間政広

佐久間報告は、「地域複合」の模範的事例として1986(昭和61)年度「朝日農業賞」を授賞した「古豊室(コトヨム)農業生産組合」のその後の経過を、とくに各個別農家の就労構造の変化に焦点をあてて追跡することにより、現時点での地域複合および農家の家族関係のはらむ問題状況を明らかにすることをめざしたものである。長年にわたる調査によってえられた詳細なデータにもとづく報告であったため、細かな点にまで多岐にわたる質疑応答がかわされたが、以下骨子を述べるにとどめたい。

対象地区においては、1972(昭和47)年、9戸による機械の共同利用・共同作業をおこなう「古豊室水稻協業組合」が結成され、そのことによって生ずる女性の余剰労働力を活用した梅干し生産が1975年より開始された。現在、年120 t.の梅干しを「角田市農協」をとおして、「みやぎ生協」へと出荷するにいたっている。

この「梅干し部門」への就労については、労賃は、地区内の農外パート労働の水準にあわせて設定されている。加えて作業場は地区内にあり、また就労者が互いに顔見知りということもあって、事情におうじた就労時間の調整がしやすいという特徴をもつ。しかし、「梅干し部門」に現時点まで就労し続けている女性は、50歳代3名であり、他の女性は、下の世代の出産を機に孫の世話が必要となった時点で、梅干し部門への就労をやめていき、現在は不足分の労力については他地区よりのパートで補充している。逆に、発足当時から就労している女性についてみると、理由は様々ながら孫の世話の必要がないという共通した特徴がみられる。より下の世代の女性は、1ケースの専業主婦をのそくと皆、結婚以前よりの農外就労を継続しており、当該部門への就労はみられない。開始当時20代後半～30代であった女性たちにとって適合的であり、創意工夫を発揮しえた就労の場が、その後の地区女性たちにとってはかならずしも同等の魅力をもっていない点に、当該部門の世代交代が困難となっている理由があるのである。

かつて、農家経済にとって、という観点から農外ではなく農業部門で労働力を燃焼しうる就労の場を確保しているという点が注目・評価された組合であったが、農外就労の経験をもつ女性個人にとって、労働の場としていかなる魅力をもちうるのかという観点から、あらためてその意義が問われている転機にさしかかっているように思われる。

(東北大学助手 加藤眞義)

アジア社会科学硏究協議会 (AASSREC)

第11回大会に参加して

神戸大学 北原 淳

AASSREC (アースレック) という名前は、1993年に第10回大会が川崎市であったので、聞いてはいたが、今回1995年10月中旬、ニューデリーでの11回大会に出席して、初めてその概要を知った。20年以上の歴史をもち、16カ国の社会科学関係の国立機関(学術会議、社会科学協議会、アカデミーなど)をメンバーとし、ユネスコが支援をするアジア地域の国際的学術交流の組織である。2年毎に行われる大会では、各国の社会科学の学会活動、学術行政の成果報告、テーマ・シンポジウムなどが行われる。

第11回ニューデリー大会のテーマは、「グローバリゼーションの国内的インパクト：社会開発問題を中心に」であった。このテーマは、中国がいち早く始め、インドもやや遅れて91年に踏み切った、投資と貿易の自由化政策(経済自由化)によって、アジア各国の国内の社会開発にどういふインパクトがあるのか、という問題関心である。乱暴に言えば、「外国資本を歓迎し、計画経済放棄や規制緩和を選択したことによって、教育、福祉など国内の社会政策、社会開発がどの程度切り捨てられたか」、という関心であろう。NIEES、中国、東南アジア、南アジアはもちろんだが、イギリスから離れアジア圏への編入をめざすオーストラリアも似たような状況にあるらしいから、これらの国々の共通の問題関心である。

第1に感じたのは、日本の場合、この共通テーマへの取り組みが難しいことである。そもそも共通テーマを十分に知らずに出かけたという準備不足もあるが、準備しても、一体、このテーマに日本としてどう対処できるのだろうか。テーマの実体に忠実なら、たとえば、工業生産のアジア・シフトによって産業空洞化を迎えた地域社会、農村で、下請部門、農村工業従事者にどのようなしわよせが来ているのか、というようなテーマとなろう。しかし、もっと抽象的、観念的に、自国の近代化と国際化がたどった道を反省し、再検討するという方向もあるだろう。シンポジウムの内容からみると、上記の問題関心に実体的に迫れる多くの途上国・中進国は、開放経済下での社会開発上の成果、問題点を中心とする報告を選び、先進国的な日本、ロシアは後者の報告を選んだ結果となった。

第2に感じたのは、科学研究の中立性に対する認識、社会科学に期待される役割が途上国・中進国と先進国とではかなりギャップがあることである。「主体思想」にもとづく社会科学を説いた北朝鮮代表の報告は前者の典型だった。この点では、同じく前者に属する中国などと比べて、オーストラリア、インド、韓国などは「先進国型」に属すると感じた。ただし、ニュージーランド代表は、社会改良運動のための「アクション・リサーチ」という実践的な研究態度を披瀝し、客観的な「科学研究」を批判した。

私の報告は、「先進国」の観念派として、「村落開発における共同体のリアリティーとアイディアリティー」と題して、日本の共同体論の変化(50年代の「近代主義」から70年代の「農本主義」への転換)をふまえながら、タイのNGO村落開発運動で主張されている自立論的共同体論を批判し、工業化アジアの共同体論は、「市民社会における部分

システムとしての共同体」という言説構造と計画理論を備えるべきだ、と主張した（詳しくは、拙著『共同体の思想：村落開発理論の比較社会学』世界思想社 1996年3月）。これに対して、同じ「先進国」の観念派として、唯一ロシア代表が理解を示してくれたが、同氏はロシアの近代化を、従来の暴力を含む普遍主義の追及一本槍から、土着主義をふまえた普遍主義というポスト・モダンな変化に転ずるべきだと、アメリカ的議論の枠組みをふまえて、抽象的に主張した。私は、オールド・ナロードニキとチャヤーノフ的ニュー・ナロードニキを抹殺したスターリンの共産集団農場による暴力的農村近代化への批判という射程をもった内容だと受け取った。

現実的な関心にたつ報告としては、1977年に、社会主義的福祉国家の経済的破綻から、南アジアではトップを切って開放経済に踏み切ったスリランカ代表の内容が印象的だった。開放化による全面的福祉国家体制の崩壊、それに代わる部分的「社会開発」への着手、結果としての所得格差の拡大、青年層の失業を要因とする民族対立とテロの激化など、開放経済のマイナス面を強調する悲観派の典型だった。オーストラリアにも似た状況があるらしい。これに対して中国代表の報告は、開放経済と教育の成果がいかによばらしかったかを誇る、楽観派の典型だった。インド代表はいわば折衷派で、開放化への態度は鮮明でなかった。挫折した福祉国家制の経験をふまえて、自由な「成長」と、それが犠牲にする「福祉」との間の矛盾を鋭く意識する旧英国植民地下の国々の知識人。それと比べて、東アジアの伝統的文化に依拠する成長を自負する中国の知識人には、両者の矛盾という認識が欠如しているのが印象的だった。

アジアの近代は、鼻息はともかく、その社会科学的な認識や水準においては、そう簡単に欧米の近代を超えられないし、超えたような錯覚をおこしてはならない、というのが印象的結論であった。インドを初体験して、「アジアの議論」にじかに触れ、そういう「目覚めへの旅」をしたという点では、えがたい機会だった。

1996年度大会について

大会事務局 大川健嗣

まだ予定ですが、以下のように考えておりますので、日程などご留意願います。詳しくは次号通信にてご案内いたします。

大会事務局：大川健嗣、横山敏、佐藤直由

連絡先：佐藤直由（山形大学人文学部）TEL.0236-28-4747（直通、FAX兼用）

大会日時：10月24日（エクスカージョン）

25-6日（本大会）

報告受付締切は6月末、報告要旨締切は8月末。

大会場所：山形県南陽市（赤湯温泉）

第9回世界農村社会学大会案内

IRSA大会プログラム委員 河村能夫

既報の通り、国際農村社会学会（IRSA）の第9回世界農村社会学世界会議が、今夏にルーマニアの首都ブカレスト（ブカレスト大学）で、共通テーマ「Rural Potentials for a Global Tomorrow」の下に開催されます。「参加申し込み」「論文要旨提出」の期限は過ぎていきますので、未了の方は至急手続きをお願いいたします。また、会議で発表を予定されている方は、Prof. Farmer (Univ. of Arkansas) に送付された Abstract のコピーを河村宛に送付願います。

- 1 会議参加申込期限 = 1995年10月31日
- 2 論文要旨提出締切日 = 1996年3月1日
- 3 宿泊申込締切日 = 1996年5月15日
- 4 会議参加費支払期限 = 1996年5月15日
- 5 会議日程 = 1996年7月22-26日（25日：エクスカージョン）

現在の会議参加予定者は30名、そのうち発表予定者は22名です。なお、会議では日本のテーマ・セッションを設定いたします。前回の会議と同様のスケジュールの場合、1セル105分です。現在、日本セッションでの発表希望者は7名、日本セッションまたは自由セッションいずれも可能の発表希望者が7名います。これらすべての人々を入れるとすれば、日本のテーマ・セッションには3セル必要かと思えます（1セル4-5名発表）。これらの日本セッションの全体のトピックは「The Crisis of Family Farms and the Feasibility of Sustainable Rural Development with Globalized Economy: Japan's Experiences」とし、それぞれのセッションのサブトピックは、発表者のトピック内容から、「Changing Family and Family Farms in Rural Japan」「Rural Policy and Part-time Farming in Japan」「Community Changes and Rural Revitalization in Globalized Japanese Economy」とつけました。ご意見などを河村までお送りください。河村のFAX番号は（075）643-8510龍谷大学・研究サービスセンターです。

世界農村社会学会にともなう研修プログラムについて

今年の7月にルーマニアで開催されます世界農村社会学会にむけて、一部の参加予定者から希望がありましたので、会議の終了後、下記のようにイタリアとドイツの農村・農業を研修するプログラムを組みことにしました。日程と研修内容について、希望される方の意向を調整したいと思いますので、4月15日までに手紙またはFAXでお知らせください。なお、ルーマニア大使館の協力で、最近のルーマニアの農業統計を入手いたしました。事前研究、その他でご希望の方は、上記同様お知らせください。

記

現時点での予定

1. 会議終了の2日から3日後にイタリア・ヴェネツィア近郊にて2日3泊くらいで研修
これについては、前パドヴァ大学農学部教授フェーロ先生（農業経営分析）から、ご協力いただける快諾を得ています。
2. その後、ドイツ・ミュンヘンまたはシュトゥットガルト近郊にて2日3泊くらい
これについては、前ホーヘンハイム大学教授のベルグマン先生（農政学）からご協力いただけることを、教え子のカン博士を通して、快諾を得ています。
3. プカレストーヴェネツィア間は航空機または列車、ヴェネツィアーミュンヘン間は列車に乗る予定です。とちらかただけでもかまいません。

連絡先：静修女子大学 人文・社会学部 社会学科 中道仁美
住所：札幌市豊平区清田4条1丁目4の1（〒064）
FAX：011-385-3370

会員異動（1996年3月5日現在、正会員数：380名）

<新入正会員>

中村則弘 （帯広畜産大学）
中田英樹 （京都大学農学部）
長屋昭義 （兵庫県立看護大学）
林 在圭 （早稲田大学大学院）
高田知和 （早稲田大学人間総合研究センター）

和智達也 （鳥取大学大学院）
坂根嘉弘 （広島大学経済学部）
山田佳奈 （東北大学大学院）
水上英徳 （東北大学大学院）

<退会会員>

笹森秀雄、佐渡和子

<住所・所属の変更>

山本正和 （新住所）

大崎 芽 (新住所)
笹原 恵 (所属変更) 静岡大学情報学部
(新住所)
渡辺啓己 (新住所)
坂本礼子 (所属変更) 所属なし
(新住所)
ガポリオ・マリ (新住所)
松村和則 (新住所)
堤マサエ (新住所)

事務局からのお知らせ
－郵便振替口座の変更について－

事務局より、郵便振替口座の変更についてお知らせいたします。次のとおり、郵便振替口座が変わりましたので、会費の納入などにさいしご注意いただきますよう、よろしくお願いたします。

(旧) 00180-1-710234 日本村落研究学会
↓
(新) 02280-5-10802 日本村落研究学会

記事の訂正のお知らせ

研究通信の記事に訂正がありますので、お知らせさせていただきます。

17頁「『年報』編集委員会からの報告」の(3)『年報』分野別研究動向の執筆者につきまして、次のように訂正させていただきます。

(誤) ③ 社会学・農村社会学・・・蘭 信三氏

↓

(正) ③ 社会学・農村社会学・・・佐藤康行氏